

風水害

被害を減らすために風水害の知識を身につけ、早めの避難を心がけましょう！



気象状況をよく聞き、早めの対応を！

台風

台風は年平均25個程度発生しています。そのうち約12個が日本に接近し、約3個が上陸しています。また、豪雨による土砂災害や洪水災害も全国各地で発生しています。

台風は襲来時期や規模がある程度事前に予測することができますが、局地的な豪雨の予測は困難です。台風が近づいているときには、最新の情報を得るように心がけましょう。

■台風の経路と新潟県への影響

新潟県に影響を及ぼす台風の進路は大きく4つに分けられます。

①日本海を通る場合

南西から西寄りの強風が吹きやすく、フェーン現象により乾燥して高温となりますので、火の取扱いに注意が必要です。前線が新潟県付近やその北側にある場合、大雨となることもあります。

②新潟県付近を通る場合

台風の接近に伴い、沿岸部や平野部で強風が吹きやすい傾向が見られます。広い範囲で大雨となることもあります。

③関東地方の内陸部を通る場合

広い範囲で大雨となる傾向が見られます。台風本体に加えて前線の影響で大雨となる傾向があります。

沿岸部を中心に北の強風が吹きやすい傾向が見られます。

④関東地方の沿岸部を通る場合

全域で大雨となる傾向が見られます。台風本体に加えて前線の影響で大雨となる傾向があります。



新潟地方気象台ホームページ
「新潟県の台風と災害」

■風の強さと想定される被害

平均風速（毎秒）	予報用語	想定される状況・被害
10m以上～15m未満	やや強い風	風に向かって歩きにくい。
15m以上～20m未満	強い風	風に向かって歩くことができない。
20m以上～25m未満	非常に強い風 （暴風）	しっかり身体を確保しないと転倒する。
25m以上～30m未満		立ってられない。樹木が倒れる。屋外の行動は危険。
30m以上～	猛烈な風	屋根が飛び、木造住宅が全壊するおそれがある。

■雨の強さと想定される被害

1時間の雨量（mm）	予報用語	想定される状況・被害
20mm以上～30mm未満	強い雨	傘をさしていても濡れる。側溝や下水、小さな川があふれ、小規模なけがれが始まる。
30mm以上～50mm未満	激しい雨	道路が川のようになる。山崩れ、けがれが発生しやすくなり、危険地帯では避難の準備が必要。
50mm以上～80mm未満	非常に激しい雨	水しぶきで視界が悪くなる。地下に雨水が流れ込む。土石流が発生しやすい。
80mm以上～		大規模災害が発生するおそれが高い。厳重な警戒が必要。

集中豪雨

集中豪雨とは、短時間のうちに狭い地域に集中して降る大雨のことで、梅雨の終わりごろによく起こります。また、その予測は困難で、中小河川の氾濫やがけ崩れなどによる大きな被害をもたらします。

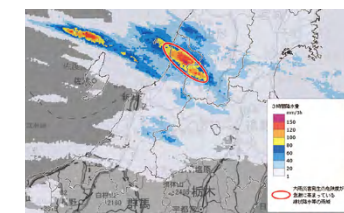
がけなどの急傾斜地や地盤の弱い造成地、河川に近い扇状地などの低地では気象情報に十分注意し、万全の対策をとるようにしましょう。



線状降水帯

次々と発生する発達した雨雲が線状に連なることにより、数時間にわたって同じ場所に強い降水をもたらす雨域を線状降水帯といいます。

また、線状降水帯が発生した場合、気象庁は「顕著な大雨に関する気象情報」を発表します。大雨による災害発生の危険度が急激に高まっていることが考えられるため、河川や崖の近くなど危険な場所にいる方は、市からの避難情報、気象庁ホームページのキキクル（危険度分布）、河川の水位情報、周囲の状況などを確認し、適切な避難行動をとってください。避難所への避難がかえって危険な場合は、少しでも崖や沢から離れた建物や浸水しにくい高い場所に移動するなど、身の安全を確保してください。具体的な避難行動については、P.24を参照してください。



（参考：新潟地方気象台ホームページ）

河川水位と避難情報について

河川氾濫の危険性が高まった場合、河川管理者より水位に関する情報が発表されます。これらの情報から避難が必要な状況を知ることができますので、覚えておきましょう。なお、水位情報は国土交通省の川の防災情報や新潟県河川防災情報システムで確認することができます。



避難に関する情報の発令基準

市は河川水位や降雨量等を考慮し、危険と判断したときは避難に関する情報を発令します。水位情報や市の発令に注視し、いざというときにすぐ避難できるよう、心構えをしておきましょう。

避難に関する情報の発令基準については、上記「河川水位と避難情報について」の図とP.22を参照してください。

避難するときの注意点

■動きやすい服装で避難

ヘルメットや帽子で頭を保護し、靴はひもで締められるものを着用しましょう。水が入り動きにくくなる長靴や裸足は禁物です。



■子どもや高齢者に配慮

なるべく2人以上で行動し、子どもや高齢者等の安全確保に配慮しましょう。



■足元に注意

水面下には、マンホールや側溝などの危険箇所があります。長い棒を杖代わりにするなどして、確認しながら歩きましょう。歩行が可能な水深はひざ下までが限界です。

